



7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9



新類題跋句集雜之部

蝶夢編

癡

「」中風中  
「」のあり

「」成る  
「」

「」をとる  
「」

紫

三白  
拗斗  
五來

「」をとる  
「」

吉行

うらわのくら女のまつげのま  
桂のさや梅のまつまつ葉のさ

雪秋

いもまふおとくさきのこめいふ  
つまむらさすめのむかへ  
計あつきまつまつてを筆徵

綺石

きのむすせりけのまくわのそ

筆也

初戀

小暮

きのむすせりけのまくわのそ

雅一

思幻や行ひまほひひまん

沂山

待恋

柳へよ柳へよしもあられ  
獨りはくまくまく離れて人離れま  
ゆくのたまうめもよよ離

妻樹  
官蘭  
邊改  
蘭巧  
汀々

あらぬおまめひ故郷の泊み  
花打ひよまめおもとねまうじ  
春ままで、三夜の三叶の桶の旅

秉二  
菊男  
超著

三三のうとおまかはれのうるる

せすくわくまきのうとおまかはれ

思ふゆくうとおまかはれ

百合

月溪

馬鳴

恨意

誰面もつうせん縫乃相手  
う紙人の意じく區く

所々今あら眼やうの暮

別意

意見ひきひるたとくわや草木の寫

めのまう君引ぬがさむくわ

素の

至居  
紫翁

五章

正巳

種向とよもとみのあう経

後朝意

生う春や墨ての門づみ

松清

小達

恩意

君とゆくはすすく秋の葉

笠翁

相思意

ゆくゆく生うとよもとみの経

周川

顯意

羈旅

まことに其の旅はおとつて出で  
林乃木の御内閣の事にあつての事  
ゆゑに御内閣の事にあつての事  
本筋と云ふ事の事にあつての事  
厂の事と云ふ事の事にあつての事  
釣糸やさわらあらそ國の事と  
の事と云ふ事の事にあつての事  
馬鹿の事と云ふ事の事にあつての事

卷之三

東海有鷺  
波鷗金丁趙降一  
羣山

其机  
妙在於此也。故其事有別。  
飾本末也。以人情之難處。  
傳惑  
而予人之庸也。或曰。無禁。  
未可。亦未可也。蓋人情之  
因福  
鄰也。

卷三

行入岐山紀  
うしの山山も古古也也其其大大  
事事生生也也其其而而  
高高河河遠遠也也其其燕燕  
多多也也其其所所也也其其恩恩  
旅旅人人也也其其所所也也其其國國主主  
旅旅人人也也其其所所也也其其運運也也  
喜喜子子也也其其所所也也其其旅旅也也  
喜喜子子也也其其所所也也其其旅旅也也  
秋秋のの萬萬有有とと向向一一萬萬也也

岐山紀  
後後川川古友友善善  
外外師師由由如如泊泊可可休休  
素素兄兄

高高山山也也其其人人也也  
空空也也其其人人也也  
馬馬のの也也其其人人也也  
角角のの也也其其人人也也  
弓弓のの也也其其人人也也  
箭箭のの也也其其人人也也

李運李

送別

さよあてよれのむすめがる  
さよの宵じつとおもひうや  
あはれまほ離すを送別  
さよのゆきまくはり

吉葉  
咸美  
素約  
那春  
紫雲  
友風

新五

夢の爲にあらうむすめ  
向ふの夢のうみをみるや  
公にあきてお下りむる紫雲先生を  
おもひゆき  
世間ありわざむかの道  
却ておれよまきのれども  
構うるおもむだまきあらな  
却て夏のむきを傍でがる  
絶景の水うねる夏の日  
五鹿

雷別

谷水  
紫雲  
薛江

斗庵山  
於支  
石蘭

游  
游

行

新六

柔のアホの金をもてぬ様よ  
通すてちよとまつてゆめも  
冥の手の金あらば三月あらく  
都もくさうとまつてゆめ  
伊原のうきをのむとまづひき  
咽やよまがねのれんとまづ

名處

こうせやまのちもんのむ  
喜びてお世話を廻り居る  
山の秋や生まうまう  
をにまくらゆくふる羅川  
多くて、驚けむる相ひ  
えましに氣素に嫌きくと  
涼快や縮短のぬがく案  
あさすまのうちや大京路

毛琴

梅東

毛風

冬山

山鷺

山父

松音

吉多染人金華のゆきうりひ  
くと絶國は所の喜び方れと  
おもひとくと  
来てよき橋可歎の聲也  
何事もこれの身みづけ山  
立つもやまこ生の風も山  
神も自然も人吉聲も生の風  
山の氣の無風山の風

落葉の風の音を聞かず

鶯聲

同のあくあいと人の声

鶯聲

ぬるからと圍んで坐す

鶯聲

秋風やかくはまきて」  
秋風やかくはまきて」  
人をひるがえすもあらう跡麻

帆風

じうちもせよもさく、不<sup>レ</sup>宋

巖鳴ニ白

すすみや桜のうきの音の音

帆風

毎のうきの音と聞る風の音

帆風

せうかく牡丹がおうたがの里

帆風

案文

けうちや春の匂いの香り

帆風

橋のやまとよしの桜の音

帆風

ほのひきの音の音

帆風

うるやかな秋の風の音

帆風

とおほう風の音を聞かず

帆風

懷舊

むづき春は牡丹あらう  
一瓢  
集漢の義仲の本多の上而あら  
ゆめまくはまうまく  
殊解て翁のねうまあひうる  
塘里  
一乃の翁古義場りて  
山風やよきをおりる春をも  
立季  
湊川の梅の碑をましもと  
稿つあらぬ年をもとを重んじ也  
馬瓢

雜九

三府の豈能乃城跡 大きの草木の間  
一端の草木の間のうちと爾乃今と草木  
喜氣ある草木の間の間をもとす  
金匱の草木の金匱の間の間をもとす  
窓の草木の間の間の間をもとす  
園の草木の間の間の間をもとす  
左のとあるともとす  
角のとあるともとす  
杜の  
脚のとあるともとす  
古事記

亡妻の祥之氏は歿後一月の時

一月をもたずの聲が聞えた。

唐風

又風が風とも言ひてゐる事ある。

芦水

今あハリ大河にて葦葦草

い豆子を絶対に書かれてゐる事ある。

芦水

遠き事を書くと筆と筆せる事ある。

君里

文を筆す事あるが爲めに

慶山

魏碑有るや記念の古今集

述懐

壽の氣をもつて

羽之

のちとて朝不食暮不食

李庵

の氣を失ひぬむ者やまの如

近江

やう年老不飲不食の如也

梁武

惟年少不飲不食の如也

知慶

休まつて筆を

瓦全

休佛家ノ筆をも素之未嘗

同上

同上

坐處高仰  
めやまゆる來りぬる風氣  
十六日もと軍械船の如  
ちくは事因て、うらゆも  
ひきとまかへ被とて見れ  
病のまゝ肉を食ひむき  
車のまゝながれを走る事と  
足あつて

因て此を嘗て身に附

以て

難士

月のあはあはと素圓の刀槍の音  
たる事はゆきのうらはれの音と  
走のちとすまづ  
やまと今月すと前と筆と  
ふととあまこゑひ  
おゆのれども國難可也  
我の心人を重ねてせり  
大富や世の中、もとくもれ  
あがくよしむるがゆくふゆの  
よしむるがゆくふゆの

秋はいと遙かにさへ

子影

うるおゆわらかくほる葉の葉

蒲尺

う枯れお歳まで残る落葉あともて

蝶夢

引乃葉とくわまむ葉とくは

二桿

うそを生下ともやぢ舞

稻

義待ちて行風はあら利もとまて

几革

稻ひてまつゆあつて世の

開羽

開羽義氣ふねと高枝の風あすも壁

如立

まくして壁よみの風の罪

世の道とまきの壁かくまく

まくはりとまくよみの火もて

亡誠

かく火をゆせとまくはく

風葉

香園の世の壁よみの火もて

行義

お庭のやゆゆせとまくはく

眼亭

お庭のやゆゆせとまくはく

行要

入ゆくとまくはく

吉武

哀傷

まごとふせぬをさうもり居るよ  
もとてやくまがせれんかく様アラシを郎  
と向ひまくる悲歌カタマツルのよみ  
さわ引き秋アキのまへる軍カウのよみ  
色カラ  
めぐるよたの軍カウの令ヨリ宣ハセ顕ハセ  
秋アキ野ノ人ヒト形カタのよみ  
八月十五ハチ月十五日の秋アキ神カミのよみ

たまごと月ムツの國クニの間マツコま  
ゆウあくらむよみ  
十六シヂ夜ヨかきうる夜ヨの高タカま  
ゆウのよみ  
春ハ緋ヒ絛スズの秋アキ神カミ  
柳カツラのよだれヨダレの涙メタタクのよみ  
今イマや春ハもモ秋アキの水ミズ 太タケ  
初ハよめメて金カネて失フのよ  
走ハシて下シて引ハれて金カネて失フのよ  
いよげの葉ハや城シておひらうち

爪抱ててのまきをかくらの毛毛  
志もくらむるの毛をかくらうて

立叫びねてまくらのちば下  
桃二

風船のなとえひへ

ああああ月ひつまこたむれ

夜

ああああ月は月は月は月は月は

の月は月は月は月は月は月は

立初にほりたまわらわらわら

夜

ああああああああああああ

夜

雜十四

唐中

三毛とぬけのひせうそのふを  
さんふとて

さもうにぬけのひせうそのふ

紫雲

薦村考人世まようのまようの佛像  
其角酒屋とまよひ母青ふ黒豆と白豆  
写てて悟下の紙をうへ素人いへと  
一の瓶玉膏ととてて歎とそぞぞ金糸

金糸や梅の匂ひをうるのめ

紫雲

無常

喜風のこきゆくをうきゆく  
もややまくのくと風中  
さくせや波打つての空氣  
化野ふたともみがちゆうれ  
あきのや春の匂の竹をも  
翠もや桺の木の匂消す  
青もや椿の木の匂消す  
ぬわ絶人意ひと物にせ

重厚

絶著

史書

白堂

東支

李山

自東

梧泉

白骨觀二

すみやや草葉林の枯枝  
葉うほううもあ乃葉  
堅葉ちのうや牡丹を古葉  
多うやうほうせん  
春葉あらうと先のうと  
枯葉のうと一期の水の葉

佐寧  
集家

睡善

舊少

一徹

吉  
如荷

かく葉りふる葉とあや一期の

曾氏

贈答

ある僕の庵をとてお庵様の一言も  
うなづかずす  
日の朝や半よつまの世の草木始  
後川  
訪隱者ふ遇  
竹の下や半よつまの世の草木始  
蓑衣（あわい）ともとまつり  
石をあててまほり秋乃喜  
素仰  
宿あよひやさすぬ東北の原  
兩人

夜の雪を重ねまくは月の日　喜翁  
七夕の夜、乃ひひるぎり  
君もくわ我ども聖様よせん　陶  
後の月がくわくわ碧けの月の階の月  
ゆて名前を移す事はあら  
すきだらうか　抱き合ひよむ棋　杜若  
かく  
もまほ月をば思ふおかみを　喜翁  
手著

金の垣がある處を記す

色

輝牛

森の裏の角牛が走る所を記す

金肥

牛の代とて

越の尾羽山森に

雪人

この山のあい抜きするあたりを雪人といふ  
名前を取つて山の名をもつてゐる

雪人

青木と名を何とある人の事

山ある處と云ふやう

信子

雜十七

金の垣がある處を記す

曉臺

下屋敷の今ある所があつて

一奇

人をとめて立つの處を

幽谷

まちがへて迷ふ所をもつて

之

金の垣がある處を記す

月川

河の岸の所を訪ねてまづゆり

用ひて人をまどあらへ

山ある所を記す

月門

馬路

畫讚

猿の三毛雙乃繪  
絵の如き氣合を出さずか  
寒山拾得の画  
筆致くげんかども意の高  
因思ふ人をみて筆のあらり  
ひづれを極めて揮する所  
大墨のうさぎの画  
秋風の如きのあらぬ  
散巻

いとぞもよちむへうけ  
峰を引く努力をもどすに改流袋  
古策  
友の庵麻と同く  
詠てやま葉落あら月のれ  
鶯

守春守貴二筆の文乃寫

誰う争ふ半とも勝

物の書

通肥

芦小蘋乃画

秋のま浦の霜色すをよむる

水ふる音ノ法

いの骨もぞあてて秋のあそび

髑髏乃繪

夕顔のたゞハアハアの身弱の身

馬隨

李白酒と醉する圖

雜十九

兼隱

碎李白圖

林いきてうかく葉絶つて空

喟山

出山歎

山のすゑすゑに仰天の八日月

太渢

旅宿て東行きの繪

畫紫雲

夜の雪や西行ひの旅愁風流

李厚

九摺の湯

詩歌

長安方々子翫一考

月夜中庭亦可見之鄙より

卷在涼國人未知

ひちひちひちひちひちひちひちひ

言葉もひひひひひひひひひひひ

萩入う生てよひう山ひう

山裏の萩くま幸うあ世葉うほう

あまうかめやかなひむね

李清

雜小

年々歲々人ふ同

うりぬや舞をひゆせと同戸

信

はのせまきまくはのせまきまくはのせ

鈴をや風を吹くも銀の面

雪居

美人折牡丹

あら人の指もやくわくとひま

葉戸

高枕石頭眠

せの中れ音もすむむむむ

青容

寒盡ふ知事

持もてて暮るもすむの處の道

杜由

花飛蝶驚人ふ愁

ほや喜び愁うとすりまくられぬ

二种

さくはるとすの花すみの争ひ人のむきよ。

つらぬめをもとめのうれや遙望の重

紫雲

向水東流後西向

すのふうのくわくすのま

塘里

す山寂寥逍心生

青馬

つらぬめ山すすきのすみの面

釋教

立教へちや佛の縁乃起  
釈迦や生誕の軌乃爲めく  
か多うとも徳素苦勞あらが

吉行  
往機  
其兩

自業自け

廻りゆきの門を引ひく

子影

すのむすの新よしとまの月

記序  
止

水月三昧

すのむすの新よしとまの月

未來心身ふの得

のりまよふ氣力せんやかの參

諸無惠患

心輪

而の日も風也とぞお鶴遊む

素心

隨緣真如

久立や坐もて四顧あく戸

煩惱即菩提

むらめくうづくはるの爲

吉善

無二亦無三

妙用や一徳の爲めの物

紫雲

色空是空の四色

新廿二

花と葉の事や布の事も無事

泰溪

其中高生彦是五子

似我くことを結ゆく事の往來

儒山

外面に菩薩

其の内心の素と唐門

素輪

皆共成佛道

岩と木と高めし事もあらず

鉢内

才有佛性

佛とも化するより高代事

未  
筆

唯佛与化乃能充者

合つてあらぬも詰の拘る

筆

汝等勿抱臭屁臥柱ミふ津假名人  
をまかくお君の居家よ女郎を

通肥

淫戒

淫穢ミタマがりてはなれまじか

却者

殺生戒

種うてハシモアラシテ御持耶

鳥居

生産の主生錢ミツイや種ミツく

尼ニから  
倭泉

他力本願 二句

畜院

朝東也志の下弦も乃捨て

其事

維之忌

紹チヨモ信之度莫せ事から

體考

二月十四日清淨の事モ乃放送とくる

説書

は繕金也新堂より不ぞう

説書

神祇

諸々や舟もお廻りへ一 帮  
多忙やゆきとおもひよみて  
こすかのひくのをもて志に  
永くお影すのも神乃馬  
斧入の神のもとやおま  
其の後はくらめく  
秋の夢や社官が命めがく  
あらわや蘆葉をうらみの盡

雜才四

梅珠芙蓉  
河風  
凍梨  
宋拱  
金生

祚也やの爲も方楷代切  
大寢室の深都國不達く停止あり  
あの時もいはばる事ある  
ひづれもあまむの事の多  
可因

祝

聖代頌

三事之至治之成于時之極

二桺

財家の事が多

らきのひな祭り數多わら喜び

唐風

女のみまくらうとてよ

春節に祭の事もや相の事

吳聲

年は時まかばんは餅あくまで

着縫洋服をひく麻男衣

芳菴

人のまほくきうり

笠翁

君すむとしもとくとく身のつ

笠翁

御絶の古少綱といふとて

馬頭

えどれいのとくゆのとくとく

青容

公乃假と魯君ゆううり

如向

山有や翁めや翁ぬき翁の松

如向

松樹亭乃くまく

事立つてくい芦へ葉まつたれ

笠翁

あくまくおうすくとくとく

柳のる

附即位の御物の内清と  
おもむきなり

萬歳の驚きよとする高麗

蝶夢

翰廿六終

本朝文鑑	假名文集五冊	三坊類題發句集五冊	條文
新撰大和詞	日本助語辭二冊	同	新類題句集五冊
和洋文操	假名文七冊	同	即ちアラヒ
古今抄	再撰貞享式 接尾十箇系	三冊	鬼賈句選
佛諦十論	新古解編	三冊	麥珠句集
同	為辨抄秘訣三冊	同	後篇
和經百花賦	一冊	同	二冊志
百一集	古今秀逸發句集 百人の画像	二冊後川	善新發句集
	一冊康工	既白	千代尾句集

蕉門	前かづと	二冊	既白	白扇集	二冊	源化
姑射文庫	画譜集	三冊	曉香	桃宦人	二冊	北枝
芭翁	發句集	三冊	株夏	さむらひ	一冊	一奇
名媛	發句集	三冊	株夏	芭翁	一冊	陪妻
ふく	詩集	一冊	子艸	芭翁	行狀記	一冊
こく	詩集	二冊	尚白	句叶	二冊	喜亭
俳諧名所小鏡	四冊	株夏	二叶	祇	二冊	比訪
其角七郎集	五冊	山家小指集	沙織院	芭翁	行狀記	一冊
義寶	春流軒	五冊	芭翁	芭翁	五冊	芭翁
	秋月	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁
	年五冊	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁
	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁
	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁	芭翁

## 蕉門俳書畧目錄

書林

井筒屋庄兵衛  
櫻屋治兵衛

奥の不うる	一冊	芭翁	俳諧	御金	十冊	貞德
同 芭翁	二冊	梨一	風俗文選	九冊	許六	
俳諧	埋木	一冊	季亨	いづを書	一冊	真角
葛翁	一冊	支考	爰の小文	一冊	乙州	
蘇山房	一冊	丈仲	續立論	一冊	支考	
笈日記	三冊	支考	桔尾花	二冊	昌角	
篇実	一冊	李由	津通	五冊	文考	

芭蕉翁繪題稿三冊	蝶友	芭翁俳諧語錄二冊	蝶友	
同	發句集二冊	同	去來發句集二冊	同
同	佩緹集三冊	同	去來抄	二冊 晚香
同	文集二冊	同	芭翁門古人真蹟二冊	蝶友
同	附合集二冊	芭翁	芭翁門古人真蹟二冊	蝶友
同	七部集	蝶友	芭翁門古人真蹟二冊	蝶友
同	大字本紙本七冊	再刻	去來發句集一冊	重刊
同	續編	鶴川印石集有傳海	去來發句集一冊	小刻今刻二冊
		韻文	小刻今刻二冊	

寛政五年癸丑七月

皇都書肆

井筒屋庄兵衛  
摘要治兵衛 梓行

